

研究課題	教師力を高め、子どもの人間関係を深めるカリキュラムの開発
副題	～コミュニケーション・スキルを高めるためのICT機器の活用～
学校名	東大阪市立楠根東小学校
所在地	〒577-0005 大阪府東大阪市七軒家17-33

<背景> 申請者らは1997年度以来、いじめ、不登校、学級崩壊など学校不適応を予防するためのカリキュラム開発、教材開発に取り組んできた。その教材の一つが、「写真コラージュ法」である。これは、子ども達にカメラを与えて校内を自由に撮影させ、現像したものを、画用紙にコラージュして作品を作るという芸術的活動を媒介とする。先行研究としては、写真撮影に関しては野田正彰氏（1988）の「写真投影法」、コラージュ活動に関しては森谷寛之・杉浦京子氏（1999）の「コラージュ療法」が上げられる。写真コラージュ法の真の狙いは、写真コラージュ作品を通してのコミュニケーション活動（言語活動）を通して、教室内に良き人間関係を築くことにある。

上記の先行研究を学校教育に応用するために、教材化とカリキュラムへの位置づけを行い、総合的学習の人権学習およびICT学習,および特別活動に組み込んだ。

本研究では、特別活動の学級活動に位置づけている。

2006年6月に成立した改正学校教育法によって、障害の種類によらず一人一人の特別な教育的ニーズに応じていくという特別支援教育が始まっているが、本校においても特別支援を要する児童が数名在籍している。そのような児童も含めて「写真コラージュ法」が児童間の人間関係向上への一助となるかについても検討する。

<独自性>

本研究の独創性と独自性の第一は、写真投影法やコラージュ法という心理学的知見を応用して学校の教育課程に導入したことである。そのことによって児童生徒のストレス軽減に寄与し、作品の発表交流で互いの自尊感情が向上することも認められている。

第二の理由は出来上がった写真コラージュ作品を掲示し、コミュニケーション・ツールとして子ども相互の発表交流に用いていることである。これによって、コミュニケーション関係が広がり、クラスの間人間関係も深まることが期待できる。

第三の理由は、ICT機器の使用を目的とせず、子どもの手で道具として使わせていることである。デジカメ、パソコン、プリンターの操作がそれである。特に写真撮影を前提としているためデジカメは不可欠のものであり、今回一クラス分の調達によって一斉授業として行うことが可能となった。

これら三つの内容を含む取り組みによって、特別活動がねらう「心身の調和のとれた発達と

個性の伸長を図るとともに、集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度」を育て、総合的学習が目的とする「主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができる」態度を養うことができるものと考えている。

<成 果>

学校現場での教育活動を通しての研究は、実験的研究にすることは種々問題があり、活動的研究の方がより適切であろう。そのため、実験群と統制群を設けることなく、A B A Bデザインの研究スタイルを取った。また、本研究の「写真コラージュ法」の最終目的は、教室内の人間関係の向上であるが、そこに至る過程に、投影的活動、ストレス軽減、対話交流（感情交流）、というステップを設けている。投影的活動とは写真撮影とコラージュ作成であり、ストレス軽減は「今の気分はいかがですか」のアンケート調査で測る。対話交流については、「ふりかえりシート」の調査結果を分析し、最後の人間関係の向上は「学級生活満足度調査」で前後調査を行い検証した。

なお、ストレス調査は、投影的活動の時間内での変化を調べる短期スパンの調査であり、「ふりかえりシート」調査は発表交流後に調べる中期スパンの調査であり、「学級生活満足度調査」は「写真コラージュ法」を複数回行った後に行う前後調査であり、長期スパンの調査である。

また、全て担任教師による授業の形態を取っているので、校内マナーや ICT モラル指導も重要である。先にこの点について述べておく。

・ 校内マナー、ICT モラルの獲得

クラス児童全員にデジカメを持たせ、作成した「活動案」に沿って活動を始めた（寺田 2005）。2年生4クラス、6年生4クラスで同様の活動に入ったが、全クラス児童、何の問題もなく、喜び楽しんで活動できていた。特に2年生の担任の「こんなに高価なデジカメを壊すことはないでしょうか」という危惧は全く不要であった。人物を撮る時は必ず許可を取るよう指導しているが、「〇〇先生、とらせてください」と職員室や校長室に向かう子どもも多く、先生方も「ハイ、ポーズ!」、「うまく撮ってね」、「美人に写してね」など、マナー学習イコール良き人間的出会いを経験した児童も多い。

また、6年生では、クラスメイト同士の撮影が多いが、その写真をコラージュするとき、人物写真に見苦しい加工をすることもなく、相手の気持ちを害しないよう配慮がなされている。

以上のことから窺えるように、子どもたちの、興味・関心が伴う集団活動では自発的にマナーを守ることができ、ICT モラルについても素直に体得できたものと思われる。

1、ストレス軽減

高学年における撮影前、撮影後、コラージュ後のストレス調査は、これまで何度も行っており、いずれも撮影前と撮影後、撮影前とコラージュ後には統計的に有意な軽減のあることが認められており、そのことが写真コラージュ法開発の前提となっている（日本特別活動学会紀要第13号 寺田 2005）。

今回、低学年の2年生でも同じ調査を試みたが、未だ、ストレスの概念が弱く、「今の気分はいかがですか」と問われても的確に答えられない子が多く、調査を取りやめた。

ただし、上でも述べたようにデジカメを手にするや喜々として撮影している姿、その写真を使って一人ももれなく集中して作品を作っている姿などから、ストレス軽減されていることは容易に想像できる。これは、担当した担任教師全員の感想でもある。

2. 対話交流（感情交流）

この調査は、公開授業を提供した2年生一クラス、6年生一クラスを対象に二度「ふりかえりシート」に記入させたものである。なお、質問項目は1. 今日のテーマは楽しかったですか。2. グループの人たちと協力してできましたか。（以上、5件法）3. グループの人たちについて何か新しい発見がありましたか。（3件法）4. グループの人たちに伝えたいことを書きましよう。5. 今日のテーマを通して、今感じていること、気づいたこと、考えたことなどを自由に書きましよう（以上、自由記述）。（エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ集 Part2 図書文化 2001）

①2年生の1回目のエクササイズテーマ：「みんなでお絵かき」

概要：クラス内を各5～6人のグループを編成して、グループごとに絵のテーマを話し合い、二つ切り大の画用紙に全員の共同作業で絵を仕上げる。次にその絵を提示して紙芝居風に発表交流するエクササイズである。

②2年生の2回目のエクササイズテーマ：「みんなでしゃしんコラージュ」

概要：上と同じグループ編成で、同じような作業を行うが、写真撮影とその写真をコラージュすることが加わる。発表交流も同じ形態を取る。この活動を公開授業として行った。

③6年生の1回目のエクササイズテーマ：「写真コラージュ発表」

概要：上と同様のグループ編成で、各児童が撮影した写真を5枚使って八つ切り画用紙にコラージュし、デザインを施す。その個人作品をグループ内で提示して発表交流する。

④6年生の1回目のエクササイズテーマ：「グループ写真コラージュ」

概要：②の2年生とほぼ同じ活動案で進めた。この活動を公開授業として行った。

<ふりかえりシートの結果>

図1. 2年生の1回目のエクササイズテーマ：「みんなでお絵かき」

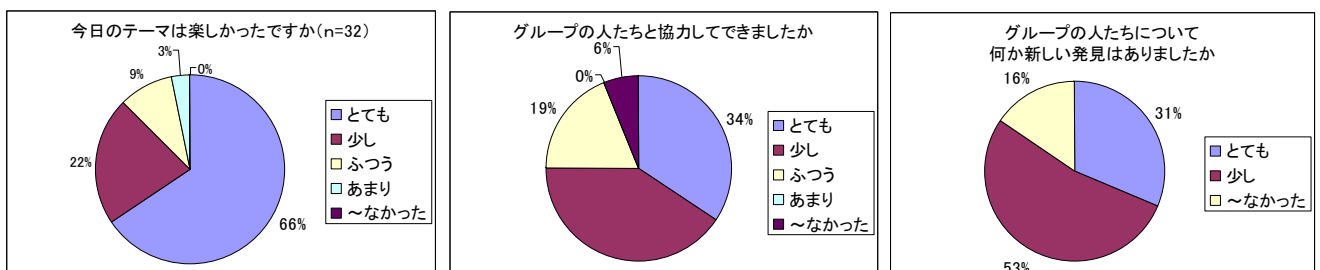


図 2. 2 年生の 2 回目のエクササイズテーマ：「みんなでしゃしんコラージュ」

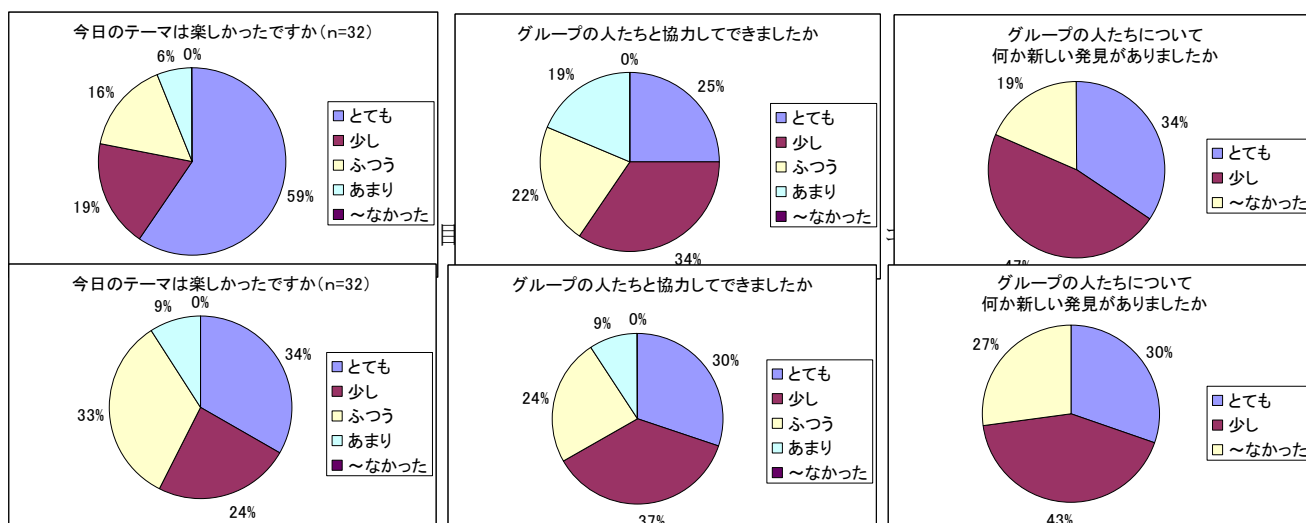
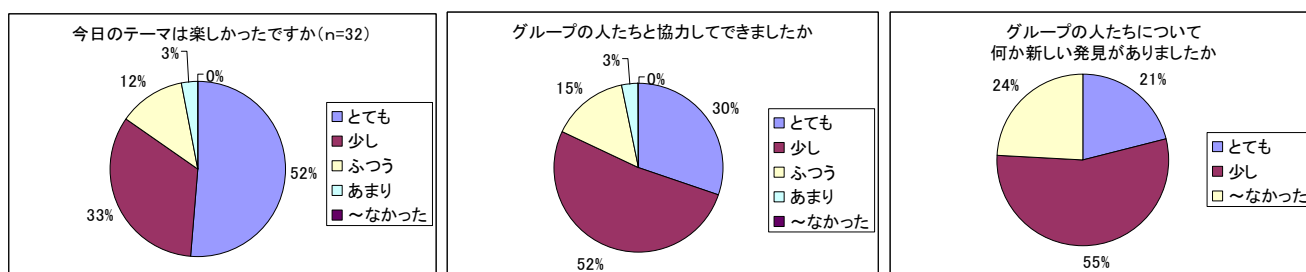


図 4. 6 年生の 2 回目のエクササイズテーマ：「グループ写真コラージュ」



< 考 察 >

最初の質問「今日のテーマは楽しかったですか」と問うた理由は、子どもたちにとっては先ず、楽しさがその授業の効果に結びつくという考えによるものであり、「写真コラージュ法」の考えとも一致する。

2年生では図 1. も図 2. も多数の子が肯定している。6年生の図 3. では個人の作品発表であるためか、他の学習発表と同様に考えて緊張しているものと思われる。それでも過半数の子が肯定している。図 4. は、グループ全員での話し合いがあり、発表後も互いに褒め合うという姿が見られるために肯定するものが増加したと考えられる。

次の、「グループの人たちと協力してできましたか」の質問理由は、学級活動が「ひとり学習」ではなくグループやクラス集団を対象としており、且つ「写真コラージュ法」が良好な対人関係を育てることを目的としていることによる。

2年生と6年生を比べると、2年生の肯定が少ない。これは、グループ活動の経験が少ないことと、グループ発表に慣れていないからと考えられる。図 2. では、さらに肯定群が減少しているが、この日は公開授業の日であり多数の参観者の前で教師も子どもも緊張していたからだと考えられる。

担任の事後感想にも「実際にはみんな楽しんでいたように見えるが、中には個の活動より全員（班）での活動となるとえんりょして、自分の思うようにはできなかった子もいたようだ。」と記述されている。それでもなお、肯定群が過半数であることが認められる。

その点で、6年生は場馴れしているのか、図3.の段階から多数が肯定しており、図4.ではさらに上昇している。この数値の上昇は活動の様子を観ていても十分頷ける。

担任の事後感想には「1回目より2回目の方が、楽しさや協力度が上がっている。これは自分一人でやるよりも、友達と一緒にの方が高めあえるということだろう。」と2年生とは反対の記述がなされている。

次に「グループの人たちについて何か新しい発見がありましたか」の質問に対しては、2年生の方が2回とも肯定している子が多い。質問の内容から見て、発見は一度限りのことであり、毎回累計されるものではないので数値の増減はあまり意味のないことと思われる。

他者を意識させることで、後の自由記述を引き出す意味があるように思える。

両担任の指示があったとは言え、2年生も6年生も全員が、何らかの感想を記述していることがその現れであろう。しかも、他者否定的なものではなく肯定的な言葉が多い。

例示すると2年生、「みんなはすきなものをかいていたし、絵もじょうずでした」、「みんながきょうりよくしてくれたから、すごくきれいな絵ができてうれしかったよ」、「ともだちはものすごくいいなと思いました。きょうりよくしてこんなに出きるとは、考えてもいませんでした」「みんなのさくひんがうまくできてめっちゃうれしかったです」、「みんなもすごくがんばっててすごかったです」など感動した様子が多数書き込まれている。自己中心性が強い年代であるが、こうした他者肯定の書き込みが目立っている。

6年生では「みんな個性的でよかった」、「みんな、発表がうまかったし、コラージュのやり方もうまかった」、「協力してできたからうれしかった」、「よい絆が深まった」、「すごく工夫されていてみんなを見本にしたいと思いました」、「これからもっとみんなのことを知りたい」、「みんなの個性がわかった」、「こんなにメンバーが仲良くなってよかった」など全員がコメントを書き込んでいる。

3. 学級生活満足度調査(Q-U)の変化

長期スパンの調査として学級生活満足度調査を行った。ここでの仮説は、写真コラージュ法によるストレス軽減および肯定的人間関係が定着すれば、学級生活満足度も上昇するであろうというものである。

質問項目は、低学年用と高学年用があるが、高学年用を提示する。全12項目あるが、クラス内での承認・不承認、侵害・被侵害のカテゴリーに分類されて図示される。

- 1 あなたは運動や勉強、係り活動や委員会活動、しゅみなどでクラスの人からみとめられる(すごいと思われる)ことがありますか。
- 2 あなたは失敗したときに、クラスの人がはげましてくれることがありますか。
- 3 クラスの中に、あなたの気持ちをわかってくれる人がいると思いますか。
- 4 あなたが何かしようとするとき、クラスの人たちは協力してくれたり、おうえんしてくれたりすると思いますか。
- 5 あなたのクラスには、いろいろな活動に取り組もうとする人が、たくさんいると思いますか。
- 6 あなたが自分の思ったことや考えたことを発表したとき、クラスの人たちはひやかしたりしないので、しっかり聞いてくれると思いますか。

- 7 あなたはクラスの人にはやなことを言われたり、からかわれたりして、つらい思いをすることがありますか。
- 8 あなたはクラスの人にぼう力をふるわれるなどして、つらい思いをすることがありますか。
- 9 あなたはクラスの人にばかにされるなどして、クラスにいたくないと思うことがありますか。
- 10 あなたは休み時間などに、ひとりぼっちでいることがありますか。
- 11 あなたはクラスでグループをつくる時などに、すぐにグループに入れないで、最後のほうまで残ってしまうことがありますか。
- 12 あなたはクラスの人たちから、ムシされているようなことがありますか。

(田上不二夫監修 河村茂雄著 たのしい学校生活を送るためのアンケート Q-U 図書文化)

このアンケートは、1～6までを「承認得点」、7～12までを「被侵害得点」として、集計して結果をグラフ化する。それによって一人ひとりの子どもの位置が、学級生活満足群（右上）、学級生活不満足群（左下）、侵害行為認知群（左上）、非承認群（右下）に類別される。そして学級生活不満足群の中でも不満足度が高い子は「要支援群」となり、教師の支援が必要であるとしている。

6年生の公開発表クラスの結果を提示する。

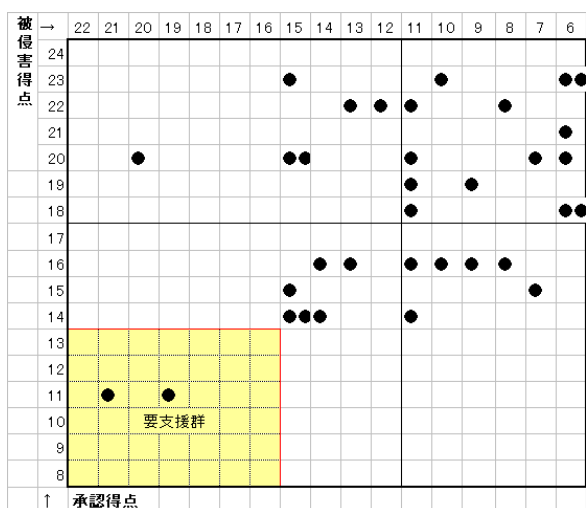


図5. 6年A組6月の結果

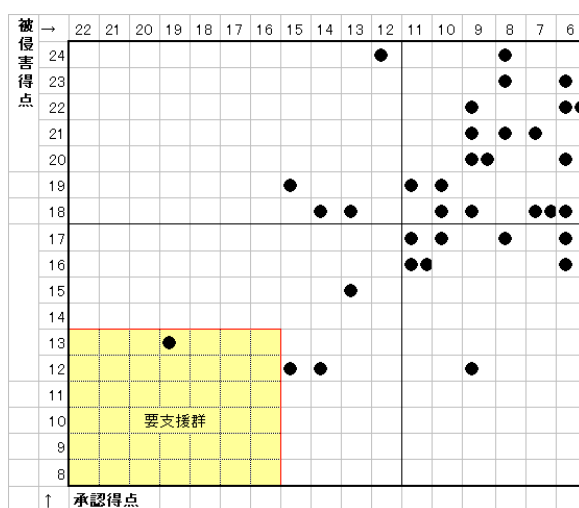


図6. 6年A組11月の結果

< 考 察 >

前後の結果を比較すると、学級生活満足群が全国平均 38%に対して、41.2%から 52.9%へと増加している。その対局にある不満足群は全国平均 26%に対して、23.5%から 11.8%へと減少している。この組の担任は、日ごろからカンセリングマインドを心がけており、写真コラージュ法の趣旨をよく弁えながら、日ごろの学級経営にも当たってきた。そうした複合的な取り組みがあってこの結果を得たように思う。担任の事後アンケートには、「友達に対してのいい点を発表し、個人個人が自分のこだわりを持って作業し、消極的な子もがんばって発表し、とても楽しんでいた」。またQ-Uの自己分析では「前期より後期の方が、クラスの間関係や自分の居場所などが向上している」と記述

している。なお、前期、要支援群にいた一人は特別支援教育の対象児であり、少しではあるが向上している。

侵害行為認知群も全国平均 18%のところから前期 17.6%から 11.8%へと向上している。非承認群は、全国平均 18%のところ、前期 17.6%から後期 23.5%へと増えている。これは、不満足群にいた数名が非承認群に移ったからであり、今後の取り組みによって減少することが期待できる。

<まとめと課題>

本研究は、学校のカリキュラムに組み込まれており、デジカメ、パソコン、プリンターなど ICT 機器の整備がなければ実現が困難であった。その点で、一クラス分の機器が確保でき、狙いとする目標がほぼ達成できたと考えている。

ICT 教育との関連で言えば、写真画像に限られる写真コラージュ法だけではなく、動画機能やプレゼンテーションソフトを用いるなど、更なる開発の余地は残る。

今後とも、改良を加えながら実践と検証を続ける所存である。